

# 古代敬語における男女差をめぐって

藁 谷 隆 純

## 一、はじめに

いずれの時代も、日本語における敬語に大きな決定的な男女差があったとは言えないだろうというのが通説のようである。しかし委細に閲すると、各時代にはそれぞれ種類の異なるいくつかの敬語の男女差が垣間見られる訳である。古代敬語における男女差について、部分的な論考はいくつか見られるが、整然たる通時的研究は先行研究にて管見に入らぬようである。もとより古代敬語における男女差の完璧なる理論構築は至難の業であろうが、本稿では、主に上代より近世までの各時代に顕著な敬語の男女差のいくつかの特徴を中心に少しく記述、考察してみたい。

ここでの「古代敬語」とは、「現代敬語」に対するもので、「上代から近世までの敬語」の意である。

なお、引用原文等の旧漢字は原則として新字体に改めた。ともあれ、日本語の敬語考察の一環として、性差、男女差という視点の導入は大いに有効であろうと考える。

## 二、上代敬語における男女差

まず、上代敬語の男女差については、代名詞「君」、及び、補助動詞「ます」「います」「たまふ」等について論じたい。

二一(一) 対称代名詞「君」は女性から男性への敬語

上代の対称の代名詞「君」は、主に女性から男性への尊敬語であったと言われる。それらは女(妻・恋人・姉妹等)から男(夫・恋人・兄弟等)へと様々なケースがあった訳である。

①あかねさす紫野行き標野行き野守は見ずや君が袖振る  
〔万葉集〕<sup>1</sup> 卷一—二〇

右歌の「君」は額田王から大海人皇子（かつての夫）への敬語である。

夫君を恋ひし歌一首

②飯食めどうまくもあらず行き行けど安くもあらずあかねさす君が心し忘れかねつも（万、卷一六—三八五七）

右歌は題詞にあるように、妻から夫へ代名詞「君」を用いている。また、題詞及び左注にて、編者から夫へ、名詞「（夫）君」を用いている。

③宇奈波良の根柔ら小菅あまたあれば君は忘らす我忘るれや（万、卷一四—三四九八）

右歌を「集成」は「疎遠になった男を恨む歌」と述べている。この男女は恋人か夫婦かそれ以外か断定はできないが、他の美しい女達（「根柔ら小菅」がその比喩）に心移ったであろう恨めしき、依然忘れられぬ男に対してこの東女（右歌は東歌）は尊敬代名詞「君」を用いているのである。因みに、「君は忘らす」の「す」も上代の尊敬の助動詞（軽い尊敬・親愛の意）なので、女は男へ一首中に二語も敬語

を使用していることになる。本歌は東歌で作者未詳なのが、代名詞「君」使用により、作者は女性であろうと、作者の性別が識別、推定される訳である。

④磯の上に生ふるあしびを手折らめと見すべき君がありといはなくに（万、卷二—一六六）

右歌の「君」は、謀反の罪（冤罪か）で自害に追い込まれた弟大津皇子への、姉大伯皇女からの敬語である。もはやこの世にいない弟に「君（「アナタ）」と心で語りかけた姉の悲しみの敬語であろう。（因みに、「新大系」は「岩のほとりに生えている馬酔木を手折りたいたいと思うが、見せてあげたいあながいるというのではないの」と現代語訳している。傍点薬谷。）

⑤秋萩ににほへる我が裳濡ぬとも君がみ船の綱し取りてば

右一首、大使。

（万、卷一五—三六五六）  
右歌は、男性（阿部継磨。遣新羅大使）が対称代名詞「君」を使用しているが、実は阿部継磨は織女の心になって歌っている。従って、「君」とは牽牛を指しており、結局は「君」は女性（織女）から男性（牽牛）への敬語ということにな

ろう。

紀女郎きいらうの、大伴宿禰家持に贈りし歌二首

⑥ 戯奴わげがため我が手もすまに春の野に抜ける茅花つばなを召めして肥えませ（万、卷八一—四六〇）

大伴家持の贈り和せし歌二首

⑦ 我が君に戯奴わげは恋ふらし賜たまりたる茅花つばなを食はめどいや瘦やせに瘦やせす（万、卷八一—四六二）

⑦の家持歌では、男性の家持が女性の紀女郎を「君」と呼んでいる。しかし、これは紀女郎が家持をわざと卑しめて呼んだ⑥の対称「戯奴（＝オマエの意）」を受けて、家持は女の立場になって「わが君」なる敬意ある呼称をもつてユーモラスに逆襲したものであろう（なお、⑦の「戯奴」は、自称「ワタシメ」の意）。

天平五年癸酉きいうの春閏三月、笠朝臣金村の、入唐使に贈りし歌一首

⑧ 玉だすき かけぬ時なく 息の緒に 我が思ふ君は  
うつせみの 世の人なれば 大君の 命みこと恐おそみ 夕  
されば 鶴が妻呼ぶ 難波潟 三津の崎より 大船に  
ま栴むすねしじ貫ぬき 白波の 高き荒海を 島伝ひ 別  
れ行かば 留とどまれる 我われは幣ぬさ引き 齋いはひつつ 君をば

待たむ 早還はやりませ（万、卷八一—四五三）

右歌は男性（笠金村）が男性（入唐使）へ代名詞「君」を用いている。しかしこれは、男性（笠金村）が女性の立場になって男性（入唐使）へ向けて歌ったものである。「我が思ふ君は」には「君」への強い愛情が表されているが、女性の立場で「われ」と「君」を使用することで荒海の異国行へのより強い悲劇・別離の情を表現したものとされている。<sup>(4)</sup>

以上、上代の対称の代名詞「君」は、基本的に女性から男性への尊敬語であった、と言えよう。（男性から女性（男性）への「君」使用が数例見られるが、それらは男性が女性の立場で詠んだり、戯れて詠んだりしているのがほとんどのものである。）

二（二） 尊敬語「ます」「います」「たまふ」は女性から男性へ使用

次に、上代の「ます」「います」「たまふ」（尊敬、補助動詞）につき考察する。

⑨ 川の上のいつ藻の花のいつもいつも来ませ我が背子  
時じけめやも（吹茨ふぶき刀あ自とじ）（万、卷四—四九一）

⑩ わが背子が帰り来ませむ時のため命残さむ忘れたまふな

右の八首は、娘むすめ子。

(万、卷一五—三七七四)

『万葉集』では、尊敬語の「ます」(用例⑥)「(肥え)ませ」、⑧「(還り)ませ」も「います」「たまふ」等はほとんどが女から男へ用いられており、男から女への使用例はきわめて少ないようである。ただし、尊敬の助動詞「す」(用例③)「(忘れ)す」も) に関してはほぼ男女同数、性差は認められないようである。その理由は、「す」は元来敬語として用いられたが、ほとんど尊敬の意を失って、親しみの意、親愛の念を添えるに過ぎなくなつたからであろうとの説もある。<sup>(5)</sup>

以上、上代については、代名詞「君」と、(補助)動詞「ます」「います」「たまふ」等につき考究した。(いずれも、主に女性から男性への敬語であつたようである。)

### 三、中古敬語における男女差

次に中古敬語の男女差については、謙讓語「聞こゆ」、女性と漢語、尊敬語「しむ」、「はべりたうぶ」(丁寧・尊敬語)等につき論述したい。

三一(一) 謙讓語「聞こゆ」は女性的

まず、中古独得の謙讓の(補助)動詞「聞こゆ」から見て行く。

⑪(母君)「くれまどふ心の闇もたへがたき片はしをだに、はるくばかりに(アナタハ命婦へ)聞こえまほしうはべるを、私にも、心のどかにまかてたまへ。…」  
(『源氏物語』桐壺)

そもそも動詞「聞こゆ」は、「聞コエル」意の自動詞のみであつた。それが中古になり、その上に、「申シ上ゲル」意の他動詞(「言フ」の謙讓語。動作の受け手を敬う)が成立、加わつた。⑪の傍線部「聞こえ」は「申し上げ(とうございますので)」の意である。「聞コエル」意の通常語(非敬語)の自動詞ではない。

すなわち、他動詞「聞く」の未然形「聞か」に、上代の自発等の助動詞「ゆ」が付いて、「聞かゆ」↓「聞こゆ」(「聞コエル」意の自動詞。現代語の自動詞「聞こえる」のルーツ)となり(母音交替)、さらに「申シ上ゲル」意の他動詞・敬語(謙讓語)ともなつた珍しい語とも言えよう。

これは、貴人に直接物を申し上げるとは失礼とされ、こちらの話す声こゑが自然に貴人の耳に入るといふ意で自発の助動詞「ゆ」を添加した「聞かゆ」(↓「聞こゆ」)が、話し手の側を主語として、「申シ上ゲル」意の謙讓表現となつ

たものである。<sup>(8)</sup> これまた、いかにも謙讓日本的な語彙の派生とは言えまいか。このように「聞こゆ」は女性的な優美で柔らかい表現であるため、女流文学に多用された。「申す」は男性的

上例の如く、『源氏物語』等の平安女流文学には、「聞こゆ」(「聞こえ給ふ」「聞こえさせ給ふ」)の文学と言つてもよいほど多用されている。例えば『栄華物語』なども「聞こえ給ふ」「聞こえさせ給ふ」等が実に多用されており、その女流作者説(赤染衛門説有り)も肯けるというものである。しかし、中古にさしも栄花を誇つた謙讓語「聞こゆ」も、中世からは衰退して行つたのである。

### 三―(二) 女性が漢語ははしたない

次に、女性と漢語と敬語表現につき考察する。

⑫ (式部丞)「…(博士ノ女ノ)声もはやりかにて言ふやう、『月ごろ風病重きにたへかねて、極熱の草葉を服して、いと臭きによりなむえ対面賜らぬ。目のあたりならずとも、さるべからむ雑事らはうけたまはらむ』といとあはれにむべむべしく言ひはべり。…」(「源氏物語」帚木)

右の傍線部「対面賜ら」(名詞+動詞)は敬語表現であり、「対面」は漢語、「賜ら」は和語である。「対面賜はる」は

和語「会ふ」の謙讓表現(受手尊敬)で、「オ会イスル」「オ目ニカカル」の意である。この(平安)時代、女性の漢語使用は、はしたない、避けるべきとされた。この式部丞が訪れた女は、実は学者の娘。右文でも、父の影響か、「風病」「極熱」「草葉」「服(し)」「対面」「雑事」など固い漢語を六語も多用している。また、敬語ではないが、「たへかねて」「(臭き)により」「目のあたりならずとも」「(雑事)ら」などは、和語とは言え、男くさい、堅苦しい言い方。「いと臭きにより」も露骨、デリカシーに欠ける、はつきり言うのも女らしくないとされた。<sup>(9)</sup>ともあれ、右文の学者の娘の話し言葉は正に男の言葉遣いであり、中古の女言葉としては極めて異様で滑稽と言えよう。「え対面賜らぬ」の敬語表現は普通の平安女性なら「え見えたてまつらぬ」などと和語で言うところであろう。「対面賜はる」は男性語的なのである。

このように、中古の女性の漢語・漢字使用は、現代(女性)とは正反対、敬られるどころか、笑われる実情であったようである。

### 三―(三) 尊敬「しむ」は男性語

続いて、尊敬の助動詞「しむ」について論じる。

⑬ あかしのむまやといふところに御やどりせしめ給

て、むまやのおさのいみじくおもへる気色を御覧じて、つくらしめたまふ詩、いとかなし。〔大鏡<sup>10</sup>〕時平〕

助動詞「しむ」は、上代では使役の意のみであった。身分高き人は物事を自らはずせすに、人を使ってさせることが多いところから、中古以降、尊敬の用法が成立した<sup>11</sup>。ただし、「しめ給ふ」「しめおはします」など他の尊敬語を伴って用いられ、その敬意を強め、最高の尊敬となる（最高敬語）。平安時代には天皇・皇后などについて多用された<sup>12</sup>。

中古には、同じ意味（使役・尊敬）をもつ助動詞「す」「さす」が現れて、主として和文で用いられるようになり、「しむ」は漢文訓読文や、説話（『今昔物語集』等）・軍記物語（『平家物語』等）などの和漢混交文、男性の会話文など男性的文章の中で用いられ、男性語として、しかも改まった語感を伴い、以後は文章語や改まった言い方として生き続けたようである。

これは後の日蓮遺文にも見える。

⑭あひかまへて御信心を出し、此御本尊に祈念せしめ給へ。何事か成就せざるべき。〔経王殿御返事〕。昭

和定本<sup>13</sup>、七五一頁〕

右の「此御本尊に祈念せしめ給へ」の「しめ」は、文脈的に「使役」では意味取れぬ故、<sup>14</sup>「尊敬」の意味である（二重敬語）。それは表面的・文面的には書簡名の「経王殿」

への敬意であるが、経王殿はまだ幼児と推されるので、結局はその父四条金吾への日蓮からの敬語になる。日蓮は真の対告衆（読み手）が四条金吾（男性）だから、男性語「しむ」（尊敬）を用いたものであろう。これが対告衆が女性であれば男性語「しむ」は用いず通常の「さす」（尊敬）を用い、「祈念せさせ給へ」とでも日蓮は記したことであろうと推測される。

ともあれ、元来非敬語の助動詞「しむ」（使役のみ）が中古以降、敬語（尊敬語、男性語）にも拡大して行ったというのも、これまた、いかにも（身分社会）日本的とも言えまいか。

三―四 「はべりたうぶ」（丁寧・尊敬）は男性語

中古敬語の最後として、特殊な文末敬語「はべりたうぶ」を見てみよう。

⑮（博士）「おほし垣下<sup>かいもと</sup>あるじ、はなはだ非常<sup>ひじょう</sup>にはべりたうぶ」（『源氏物語』少女）（訳・「宴席ノオ相伴役ノ方々ハ、ハナハダ無作法デイヤラツシャイマス。」）

「はべりたうぶ（侍り給ふ）」は、「…なさいます」の意の二方面敬語（補助動詞）。丁寧語「はべり」が聞き手を、尊敬語「たうぶ」が動作主を敬う。右例では、話し手の博士たちが、「はべり」を用いて聞き手である一座の人々を

敬い、「たうぶ」を用いて動作主「垣下あるじ」である右大将や民部卿を敬っている。

「はべりたうぶ」は、『宇津保物語』『源氏物語』等に数例見られ、博士や僧侶など特殊な職業や召し使いの男性が用いていて、男性語と言えよう。(なお、丁寧語の下に尊敬語が付く用法は、「はべりたうぶ」以外には例が少なく、かなり特殊な用法であろう。)

以上、中古については、(補助)動詞「聞こゆ」、助動詞「しむ」、丁寧・尊敬「はべりたうぶ」、女性と漢語等につき考察した。(特に、中古に、非敬語から重要敬語が二つ生まれた。すなわち、「聞こゆ」に謙讓語が生まれ女性的敬語となり、使役「しむ」に尊敬語が生まれ男性語となったことは興味深い。)

#### 四、中世敬語における男女差

続いて、中世敬語の男女差については、補助動詞「さうらふ・さぶらふ」及び、代名詞「貴辺」「御辺」「貴殿」等につき見て行く。

四一(一) 丁寧・補助動詞「さうらふ」は男性語、「さぶらふ」は女性語

まず、文末表現の補助動詞「さうらふ」「さぶらふ」の性差について考察する。

①「大納言がことをばいかが聞こし召され候(さうらふ)」「平家物語」二・少将乞請

②(仏御前)「是へ召されさぶらへかし。さらずはわらはに暇(いしよま)をたべ。出でて見参(けんさん)せん」と申しければ(「平家物語」一・祇王)

丁寧語の補助動詞「さぶらふ(候ふ)」は中古に多用された(上代は「さもらふ(候ふ)」。)。「さうらふ」は中古末期から中世初期にかけて「さぶらふ」から転じた語である。そして、次第に「さうらふ」が多用されて「さぶらふ」は用いられなくなった。中世の『平家物語』や謡曲では、「さうらふ」は男性が用い、「さぶらふ」は女性が用いるというように、性による使い分けが見られた。右例は①は「候(さうらふ)」使用なので、話者は男性(少将)であり、②は「さぶらふ」使用なので、話者は女性(仏御前)である。(或いは、「さうらふ」の方には長音が二つ入って強く勇ましく断定的な音感・音声ゆえ男性が用い、「さぶらふ」の方は弱く穏やか断定的でない音感・音声ゆえ女性 が用いたものかも推察されるがいがが。)

また、「さむらふ」は謡曲で多用され、女性の言葉として用いられている。

四―(二) 「貴辺」「御辺」「貴殿」は男性語

次に、尊敬の対称代名詞「貴辺」「御辺」「貴殿」等につき見てみたい。

#### A、貴辺

⑱ 此経難持事。抑弁阿闍梨が申し候は、貴辺のかたらせ給ふ様に持らん者は現世安穩後生善処と承て、すでに去年より今日まで、かたの如く信心をいたし申候処に、さにては無して大難雨の如く来り候と云云。(日蓮遺文―四条金吾殿御返事。八九四頁)

⑲ 貴辺すでに俗也、善男子の人なるべし。(日蓮遺文―権地四郎殿御書。二二七頁)

⑳ 其の国の仏法は貴辺にまかせたてまつり候ぞ。(日蓮遺文―高橋殿御返事。御書全集、一四六七頁)

右例の如く、漢語「貴辺」は対称の代名詞で、相手を敬つて言う敬称である。中世から用いられ、近世の滑稽本「人心視機関後編」にも武家の言葉として用いられており、江戸後期まで使われていたようである。ロドリゲス『日本大文典』には書き言葉か荘重な話し言葉に用いられるとあり(漢語のゆえであろう)、公式的な語であったことがうかが

える。

右例⑱中の「貴辺の：来り候」までは四条金吾の弁阿闍梨への会話文の引用とするならば、武家詞「貴辺」は、鎌倉武士の金吾が弁阿闍梨へ直接言ったことになろうか。手紙や文書等で用いたのではなく、話し言葉で用いたことになろう(⑲⑳等は手紙文等で用いている)。

#### B、御辺

㉑ 「御辺は東八ヶ国をうちしたがへて、東海道より攻めのほり平家を追ひおとさむとし給ふなり」(『平家物語』七・清水冠者)

右例の如く、「御辺」は、対称の代名詞。同輩またはやや目上に対して武士が用いたとされる。『平家物語』等の軍記物では武家が対等程度の者に対して敬意を持って用い、また、ロドリゲス『日本大文典』には敬態で、書きことばか荘重な話しことばかに用いられるとあり、敬意が高いと思われる。しかし、江戸前期上方語では、文語文脈で武士や僧侶によって男性語として、対等または対等以下の者に対して用いられるようになり、敬意が下がったとされる。

#### C、貴殿

②② (川人)「貴殿ト川人トコソ、此罪ヲバ負ツラメ。」(今昔物語集<sup>19</sup>)二四—一三三)

②③ 「何と成供、御貴殿之御はからい、悪事わるわざはあらじとて」(三河物語)

右例のように、「貴殿」は、対称の代名詞。同等または同等以上の男性に対し、敬意をもって用いる語。男性が男性に対して用いる語。江戸前後には、武家が目上の相手を尊敬して呼ぶ語として使用されたが、のちには同輩に対しても用いられたようである<sup>20</sup>。

この対称「貴殿」は、近現代日本にも残り、「貴殿を面接員(裁判員、部長、…)に任ずる」などと、辞令・通知書・賞状等の改まった文書等で、男性のみならず、もはや性差消滅して女性へも、書記言語として用いられてきた訳である。また、現代方言として、「アナタ」(対称)の意で、口頭言語として、長野県諏訪市等で用いられているようである。そういう意味では、前述の「貴辺」「御辺」などと異なり、代名詞「貴殿」は誠に息(命)の長い敬語と言えようか。

以上、中世については、文末補助動詞の「さうらふ」は男性語、「さぶらふ」「さむらふ」は女性語と、『平家物語』・謡曲等では明らかに性差が存したようである。また、対称

代名詞「貴辺」「御辺」「貴殿」等いずれも男性語、武家語的であった。三—(二)「女性が漢語ははしたない」でも述べたが、いずれも漢語というのも一因であろう。

### 五、近世敬語における男女差

次に、近世敬語の男女差については、謙讓語「おめもじ」、尊敬語「おひるなる」、丁寧語「まゐらせそろ」、丁寧語「ありんす言葉」等につき考察したい。

五—(一)「おめもじ」は謙讓の女性語

先ず、名詞「おめもじ」につき見て行く。

②④ かねても御めもじのふしに、申しまゐらせ候とほり(人情本「春色辰巳園」四・七条)

名詞「おめもじ(御目文字)」は、「おめ(御目)にかかると」意の女房詞(ソノ中ノ、文字詞)で、もともとは女性語であった。多く手紙文などで女性が用いた。「おめもじ」は、「おめにかかると」(動詞「会フ」の謙讓表現で、「才会イスル」意)という言葉の第三音節以下の、かなりの部分(助詞+動詞「にかかると」)の四音節を省いて、冒頭のわずか二音節(名詞「おめ」)に接尾語「もじ(文字)」を付したものであるから、「おめもじ」は尊敬語ではなくして、

実は謙讓語なのである。(ただし、「おめ(御目)」のみだと相手の御目なのだから尊敬語となり、相手への敬語であるが。)

②⑤「やれようこそおじやつたれ。此間はおめにかからなんだ。」(虎清本狂言『薬水』<sup>21</sup>)

「おめもじ」をさらに丁寧と言った「おめもじさま」というのもあった。<sup>19</sup>「さま」は丁寧の接尾語。

②⑥「御用とは何ならんおめもじ様にと夕がほの」(浄瑠璃『姫山姥』)

これも女性語であろう。

(なお、女房詞は中世の成立だが、女房詞「おめもじ」は近世の作品に多出しているようなので、本稿では近世の章にて論じた訳である。)

五―(二)「おひるなる」は尊敬の女性語

次に、動詞「おひるなる」につき考察する。

②⑦朝はとうからおひんなり嫁をねめ(『柳多留』二二) 複合動詞「おひるなる」はもともと「お起きになる」意のこれまた女房詞、女性語であった。名詞「ひる(昼)」に接頭語「お」が付いた「おひる」(名詞)の動詞形が「おひるなる」である。「おひるなる」の三音節目の「る」が撥音化して「おひんなる」ともなった。撥音の入らない「お

ひなる」もある。<sup>23</sup>

右川柳の二述語(動詞)「おひんなり」「ねめ」の主語は、第三句に「嫁」とあるので反射的に、いずれも「姑」となるのである。しかも、「おひんなり」の方のみ姑へ尊敬語(女房詞)を用いた。「姑どのは」朝早くからお起きになつて、嫁をにらみ(監視していることよ、やれやれ朝も早よからご苦労なことだ)と、ここ「おひんなり」は普通の尊敬語というよりは、姑へのいわゆる皮肉・揶揄の敬語の用法であろうか。(類想川柳として、敬語は不使用だが、「姑の日向ぼっこは内を向き」等がある。)

「おひるなる」は中世(室町期)には女房詞であるが、近世には一般女性の間にも普及し、「おひるなる」の語形で『婦人養草』『女重宝記』『女中詞』『女節用集文字囊』等に記されている。現代方言として高知県東部等には「起きる」意の尊敬語「おひるなる」が残っているようである。一方、「およる」(名詞)「およる(御夜)」を動詞化した語」という語がある。「寝る」意の尊敬語(「オヤスミニナル」意で、多く女性が用いた(「およるなる」「およんなる」とも)。動詞として確立した中世後期には、敬度の高い女房詞として用いられ、近世初期になると、一般女性にも使用が広がったとされている。

五―三 「まゐらせそろ」は丁寧の女性語

続いて、丁寧の補助動詞「まゐらせそろ」につき考究したい。

⑳ 何事も先生まかしやうよりの定り事とあきらめまゐらせそろ

(浄瑠璃『伽羅先代萩』)

㉑ 読長文は御台よむながより敵の様子こま／＼と。女の文の跡

や先。まゐらせそろではかどらず(26) (浄『仮名手本忠臣蔵』)

「まゐらせそろ」は、近世、主として女性の手紙文に用いられた丁寧語(連語)である。これは補助動詞「まゐらす」に、同じく補助動詞「さうらふ」の転じた「そろ」の付いたもので、「…(して)おります」「…(で)ごさいます」「…申し上げます」等の意味で、読み手を敬う意を表している(27)。(「聞き手敬語」「読み手敬語」)。なお、『日本国語大辞典』二版では、「動詞『まゐらす』に補助動詞『さうらふ』の変化した『そろ』の付いたもの」と記述するが、右例⑳でも本動詞(「あきらめ」)に「まゐらせそろ」が下接しているので、「動詞『まゐらす』に」でなく、「補助動詞『まゐらす』に」と記した方がよいかと考える。傍点藁(谷)

また、「まゐらせそろ」(補助動詞、連語)全体で一名詞の意味も生じた。すなわち、敬語「まゐらせそろ」が近世

女性の手紙専用の語(主に文末表現)であるところから、「手紙。特に、恋文」という非敬語の意味が成立したことは興味深い。

㉒ 逢はぬ間のつらさを文に物(イ)いわせて。まゐらせそろを(28) 楽しむ(29) (浮世草子『新色五巻書』二・二二)

因みに、㉓ 川柳は、「兼好法師は」随筆『徒然草』の外(30)に、(高師直に依頼されて) こともあるうに、『まゐらせ候』すなわち「恋文」まで代筆したことよ(31)の意である(元来、『太平記』に見える)。勿論、高師直は(兼好法師も) 男性ゆえ、その各文末表現に近世の女性語「まゐらせ候」は余り用いなかっただであろう(兼好・高師直は南北朝期で、時代も合わない)。㉔ 「つれづれの」句中の「まゐらせ候」はあくまでも「手紙(恋文)」の意の非敬語(名詞)である。文脈的に敬語(動詞・補助動詞等)ではあり得ない(「まゐらせ候」に上接する本動詞等も無いからである)。要するに、南北朝の兼好が、高師直に、「(恋)文」を代筆してやったと表現せずに、近世女性の手紙の文末表現でもあり、(恋)文の意である「まゐらせ候」を書いてやったと表現したところに、本句の面白味が存しよう(男性語と女性語の性差、中世と近世の時代差という二矛盾を故意にはらませたことにより、句のおかしみ感は一層増幅されていると考えられ

る。

五―四 「ありんす言葉」は遊女語

最後に、近世特有の「ありんす言葉」につき見て行く。

③② (女郎) 「きのう向島へ行きんした」が、いっそおもしろうありんした。わっちはいっそ侍になりとうありいす」(『柳巷詠言』)

この「遊女語」は、「遊里語」「廓詞」「里ことば」等とも称され、その「ありんす言葉」は「ありいす言葉」とも呼ばれた。これは全国から集った遊女達の「ひなの訛り」を隠すための人造語とも言われる。文末の敬語表現「ありんす」の「ます」(丁寧・助動詞)が「ありんす」となる撥音化の現象が遊女語の最も著しい特色なので、遊女語は、「ありんす」で代表させて「ありんす言葉」と言われた訳である(『いんす言葉』<sup>30</sup>)。③②の「ありんし」は「ありんす」の連用形、「行きんし」は「行きんす」の連用形である。

しかし、遊女語は同時代の一般には普及しにくかったようである(その点が、女房詞とは異なる)。ただし、この遊里で用いられた「ざんす」「ざます」「遊ばせ」(丁寧語・尊敬語)などは、開国後近代化された明治時代の上流階級の女性の上品・みやびな言葉として、受け継がれて行った

のは興味深い。<sup>31</sup>

以上、近世については、謙讓の名詞「おめもじ」、尊敬の動詞「おひるなる」、丁寧の補助動詞「まゐらせそろ」、丁寧語「ありんす言葉」等につき論じた。それらは奇しくもすべて女性語である。取り上げ方にも問題はあろうが、ともあれ、近世には女性語が種々活躍したと言えよう。

#### 六、おわりに

上述の如く、古代敬語における男女差について、上代では、対称代名詞「君」は、主に女性から男性への尊敬語であり、また、(補助)動詞「ます」「います」「たまふ」等も、主に女性から男性への尊敬語である。ただし、それらはいくまでも『万葉集』においてはであって、上代全体の敬語の男女差については今後の課題である。次に、中古では、非敬語から生まれた謙讓語「聞こゆ」は多用され、女性的敬語であった。また、使役から生まれた尊敬語「しむ」は男性語であった。「はべりたうぶ」は博士・僧侶等の特殊な男性語である。それから、漢語・漢字を駆使する女性には、尊敬されるどころか、はしたないとされた。続いて、中世では、文末補助動詞の「さうらふ」が男性語、「さぶらふ」

が女性語である。ただし、それは『平家物語』や謡曲等における特徴であり、広く中世の他の文献等の調査は今後の課題となる。最後に、近世では、女房詞由来の「おめもじ」は謙讓語だということ（尊敬語ではない）、同じく女房詞起源の「おひるなる」には対応形「およるなる」も存したこと。また、「まゐらせそろ」には(1)女性の手紙の文末表現（丁寧語）、(2)手紙、特に、恋文の意の名詞（非敬語）の二意が存した。そして、「ありんす言葉」は遊女語で、一般に普及せず（そこが、室町期誕生の女房詞と大いに異なる点）。近世では女性語を多く論じたが、当然男性語も複数存するはずで、それらは課題となろう。

ともあれ、紙幅の関係等で、部分的記述・考察であったが、それら男性語・女性語には、それぞれの時代・社会・思想・男性観・女性観等々が如実に反映していると、強く感じ取れる訳である。本稿はあくまでも一試論である。

また、全体的にも、地の文・会話文・書簡文等に分けての考察、口語・文語の別、男から女へ、男から男へ、女から男へ、女から女への別、また、使用の場面性、散文と韻文、作品文献等の性質による性差等に、更に緻密に分類・分析しての実証的・体系的研究が今後の課題である。

注

- (1) 新日本古典文学大系（岩波書店、平成十一年、第一刷）による。以下同じ。
- (2) 新潮日本古典集成（新潮社、昭和五七初版。平一四、六刷）による。
- (3) 『万葉ことば事典』（大和書房、平一三、第一刷）参照。
- (4) 注(3)に同じ。
- (5) 「万葉に於ける男女の言葉」（澤湯久孝『国語国文の研究』第十号、昭二）、同「万葉集に於ける男女の言葉」（『万葉集新釈下巻改訂版』、星野書店、昭二三）、佐伯梅友「男女の言葉」（『国語史』「上古篇」）（刀江書院、昭一一）、同「男女の言葉」（『奈良時代の国語』、三省堂、昭二五）参照。
- (6) 新編日本古典文学全集（小学館、平六）による。以下同じ。
- (7) 『古語林』（大修館、平九、初版第一刷）参照。
- (8) 注(7)に同じ。
- (9) 注(6)等参照。
- (10) 日本古典文学大系（岩波書店、昭三八、第三刷）。
- (11) 『ベネッセ全訳古語辞典』（株式会社ベネッセコーポレーション、平八、初版。平一四、初版第一四刷）参照。
- (12) 注(7)に同じ。
- (13) 『昭和定本 日蓮聖人遺文』（身延山久遠寺、平一二、改訂増補第三刷）による。以下同じ。
- (14) 注(7)に同じ。
- (15) 新編日本古典文学全集（小学館、平一九、第一版第六刷。以下同じ）。

- (16) 『日蓮大聖人御書全集』(創価学会、昭二七、一刷。昭六〇、一六四刷による)。
- (17) 『日本国語大辞典』第二版(小学館、平一四、第二刷)参照。
- (18) 注(17)に同じ。
- (19) 日本古典文学全集(小学館、昭六二、第十五版)。
- (20) 注(17)に同じ。
- (21) 『時代別国語大辞典 室町時代編』(三省堂、昭六〇)参照。
- (22) 注(17)に同じ。
- (23) 注(17)に同じ。
- (24) 注(17)に同じ。
- (25) 日本古典文学大系「浄瑠璃集(下)」(岩波書店、昭三四、第一刷)。
- (26) 日本古典文学大系「浄瑠璃集(上)」(岩波書店、昭四七、第十刷)。
- (27) 注(7)に同じ。
- (28) 日本古典文学大系「浮世草子集」(岩波書店、昭四一、第一刷)。
- (29) 注(17)に同じ。
- (30) 『新版国語学要説』(佐藤喜代治編、朝倉書店、昭四八)参照。
- (31) 『女のことばの文化史』(遠藤織枝、学陽書房、平九)
- (わらがい・たかすみ、本学教授)